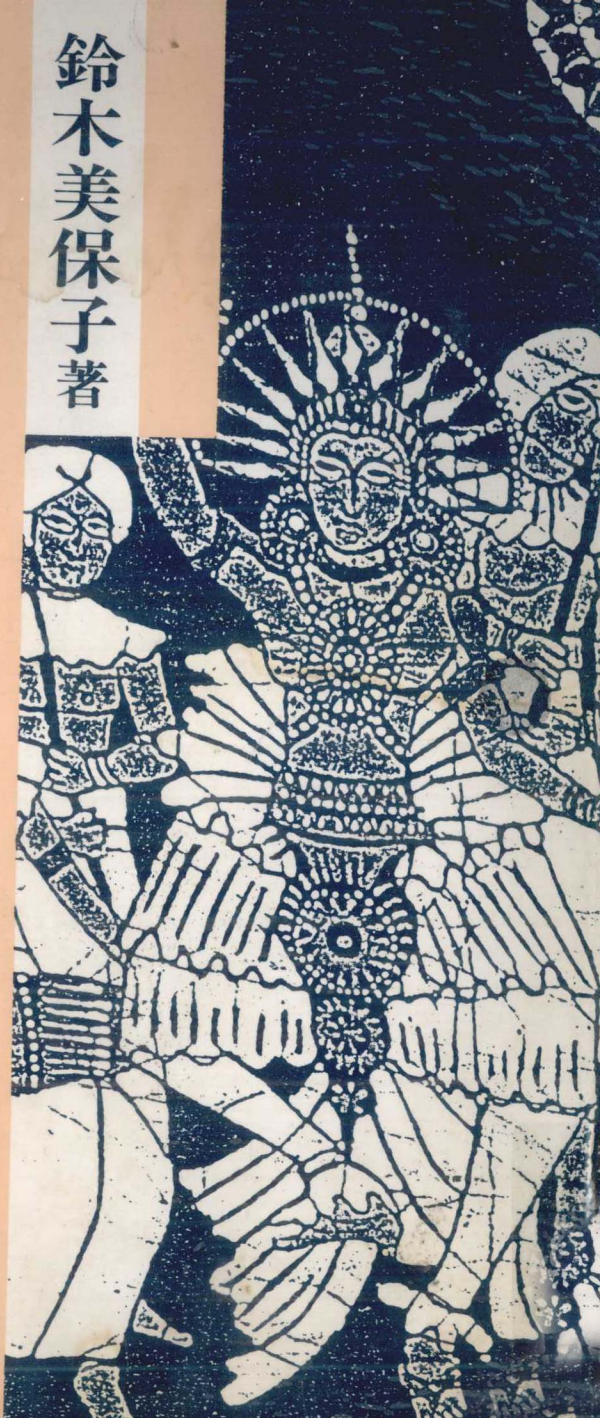


鈴木美保子著



インド風まかせ

女ひとり放浪の記

連合出版

〈著者紹介〉

鈴木美保子（すずき みほこ）

1959年福島県生まれ。1981年，早稲田大学文学部卒。中東史専攻。卒業後，編集の仕事を経て現在，フリー・ライター。

訳書『アジアの奥地へ』（レーリヒ著，共訳，連合出版）

インド風まかせ

© M. Suzuki, 1984

〈検印廃止〉

1990年11月20日 改訂版第1刷

著者 鈴木美保子

発行者 八尾正博

発行所 有限 連合出版
会社

東京都千代田区神田神保町1-8 第一野ロビル

〒101 電話03(292)8722 振替 東京3-15079

FAX 03(292)8787

印刷／東銀座印刷・製本／KMS

万一，乱丁・落丁本がありましたら，おとりかえいたします。

鈴木美保子

インド風まかせ

女ひとり放浪の記

連合出版刊

プロローグ

先日、私のところに突然、あるカサブランカの男から、一通の手紙が舞い込んだ。

「(前略)……君は、早春のあの日、パリの夜を共に過ごした男を覚えてるだろうか。……」

この文面だけでは、何と蓮っ葉な女だろうとのっけから無用の誤解をされてしまいそうなので、少しだけ付け加えろと――。

そのジプシー風の容貌をしたモロッコ人の男と私が会ったのは、飛行機のエンジントラブルのために、行く予定もなく連れていかれたロンドンのヒースロー空港でだったらしい。なぜ「らしい」のかというと、私は、パリのシャルルドゴール空港に降り立つまで、その男がいつて来たことなど知らなかったからだ。深夜二時をまわっていてどの安ホテルにも断られることを見越した彼は、パリ市内にある彼の友人宅に行こう、と申し出てきたのだ。実際、私は、予定していたユースホステルの門限はとうに過ぎているし、真夜中に安宿街を一人ふらついてもロクなことはいないし、第一、一フランすらも持っていなかったし……で困っていた。こうして私は、ヨーロッパに降り立ったその第一夜からさっそく、その少々無謀ともいえる賭けに出

る決心を余儀なくされることになったのだ。

こうして私たちには、その友人宅の客間の一室が提供されることになった。

手紙はさらに続く――。

「本当のところ、何もせずに一夜を共に過ごした女は、君が初めてだ……」

翌朝、何もなく目を醒ました私たちは――もちろん彼は、「今朝はその気になったかい？」と確かめるのを忘れなかったけれど――、クロワッサンとカフェ・オーレの朝食の後、「じゃあね、ボン・ヴォワイヤージュ！」と言って別れたのだ。

それから私は一人、北のシエルブル行きの列車に腰を落ちつけて、「さあ、もうおまえの旅は始まっているんだゾ」と大きな深呼吸をひとつして、自分に言いきかせた。私の旅は、こんなふうにして危なっかしく、パリではじまった。

もともと三カ月の予定の旅は、ヨーロッパのあらゆる国境を越えて、エーゲ海の匂いのするアテネにたどり着いた時に終わっているはずだった。ところが、私が飽くことなく求めていた「何か」は、越えた国境の数に関係なくいつも私について回った。

夕暮れの路地裏に影を落とす、ドイツの田舎町の教会にいた時も、北の果て、オスロの港に吹きすさんでいた冷たい雪混じりの風に吹かれていた時も、ユーゴスラビア南部の一面の赤いポピーの野原や、赤茶けた山々の間をぬって走りながら、ギリシャまで私を連れていった列車

の中にまでも……。

私は、自分が閉塞された「豊かな」社会の中に埋もれて、実は、自らが自らの主人たることすら放棄していることに疲れ切っていた。私は、そうやって血色よく死にながら生きることの欺瞞には、もはや耐えられなくなって、旅に出たのだ。真の自己からは永遠に疎外されて生きるなんて、まっぴらだ。逃避、ではない。なぜなら私は、胸の奥底に、もの凄く強烈で激しい情熱、もっとも聖なる炎が燃えさかっているのを知っていたからだ。私が欲しかったのは、あらゆる偽りの「豊かさ」をはぎとったところにある本物の感覚だけだった。言ってみれば、「私は私になりたかった」のだ。

多くの人々に出会い、そして別れた。

疲れたら休めばいい。淋しかったら眠ればいい。明日もまた日は昇り、旅人はまた立ち上がって、その日の風の中を歩き出す。

そうして、まるで風に吹かれるみたいにヨーロッパを放浪しているうちに、期せずして確信せざるを得ないことがあった。それは、この世に「偶然」は無いことだった。「もし、あそこであの人に会わなかったら」という仮定そのものが無意味なのだ。もし、ストックホルムで「あの人」にインドの旅の話を書かなかったら、もし、リスボンで「あの人」にゴアの魅力を吹きこまれなかったら、もし、イスタンブールで「あの人」が、このアジア大陸を行けばインドに

行けるのだと目を輝かせて語ってくれなかったら……。私もそういう幾人もの「あの人」によって、風に吹かれるように、思ってもみなかったインドまで運ばれることになった。

そして、そのインドでは期せずしてビザを延長し一九八三年の夏から暮まで、半年近くも居つくことになった上、まさしく「目からウロコが落ちる」経験をするのだ。インドは確かに、私の内部に大きな変革をもたらした。そうしてインドは私にとってますます離れ難いものとなっていった。

私はこれからも、またインドに行くだろう。それ以来、インドは私の内に棲みはじめた。

鈴木美保子

1	国境を越えて	11
2	スリナガル	27
3	ラダック地方	36
4	ペナレス	48
5	ネパール	63
6	カルカッタ	79

ラホール YWCA / 友愛の『K2』 / とんだ、いいバイト、 / いよいよインドへ / 行先は
 風まかせ / アムリツァルの黄金寺院 / ジャムー 行きの列車
 湖上のゲストハウスへ / 東洋のベニス / インド入国の儀式
 あせらない、あせらない / シャングリラ / 民族と宗教のつぼ / 小チベット・レーの街 /
 インド独立記念日 / バスはその日の運次第
 下界へ下る苦行の旅 / ジャムー からデリーへ / 俊太の相つぐ受難 / ペナレスの日本人集落
 / 聖なるガンガのほとりで / 宇宙的交合 / 死を待つ人々の家
 心奪う窓外の風景 / ヒッピーの冒険 / ヒマラヤの荘厳な夜明け / 心安まるカトマンドゥ /
 ハリ少年に連れられて / 三千世界を見渡す目 / さようなら プリシラ
 再びインドへ / 雨に煙るダージリン / エベレストが見える！ / ダック力行きは断念 / い
 いかげんにして！ / カルカッタでジョンに再会 / インドの縮図、カルカッタの街 / もうひ
 とつの時間軸

7

ブダガヤ

.....
 ガヤでジョンと再再会／仏陀成道の地、ブダガヤ／ジョンの日課／竹林精舎の町、ラジギール／自然と交わるということ

8

デリー・アグラ

.....
 パトナからデリーへ／郵便小包を送るまで／乾いた町、ジャイプール／アグラへの苦行／白亜の廟、タージ・マハール

9

カジュラーホ

.....
 駅のリタイアリング・ルーム／カジュラーホの、お父さん／開けっぴろげな性の饗宴／心にしみる、人の優しさ／インドールからジャルガオンへ／アジャンタの遺跡／ジプシーとサンガラス／エローラの遺跡

10

夢の楽園ゴア

.....
 旅の宿も風まかせ／まるでここはポルトガル／白さにこだわるインド人／ヒッピー村／Tomorrow is Another Day／ここは地上の楽園／漂泊の思いやまず

11

バンガロール

.....
 インドで一番きれいな街／旅人の孤独／カメラ盗難事件／R警部との出会い／マイソール観光バスに便乗して／32人が同居するR警部の家／バンガロール郊外の村へ

12

ケララ州コチン

.....
 再び平地へ／愉快なマリアーノ／ジョイ家に闖入した、E・T／戦争の傷跡の生々しく

94

104

114

128

142

155

13 インド最南端.....166

トリヴァンドラムへの道／国を離れたイスラムの女／愛の共同体への誘い／ごめんね、ジ
ヨイさん／三つの海をのぞむコモリン岬

14 マドライ・マドラス.....177

南の聖地マドライ／明日もまた日は昇る／植民地時代の名残りのこすマドラス／どこへ連
れて行かれるのやら／村の老婆に運をまかせ

15 旅の終わり.....187

デカン高原の町、ハイデラバード／ラーマ・クリシュナの世界／思いがけない日本料理／
ボンベイの安宿で／光まばゆい、女王の首飾り／どうやって帰ろうか／ボンベイの暑い
夜／旅の最後の避暑地、ロナウラ／ボンベイ駅の見送り人／二晩がかりのフロンティア・
メイル／図々しいたらありゃしない／さようなら私のインド

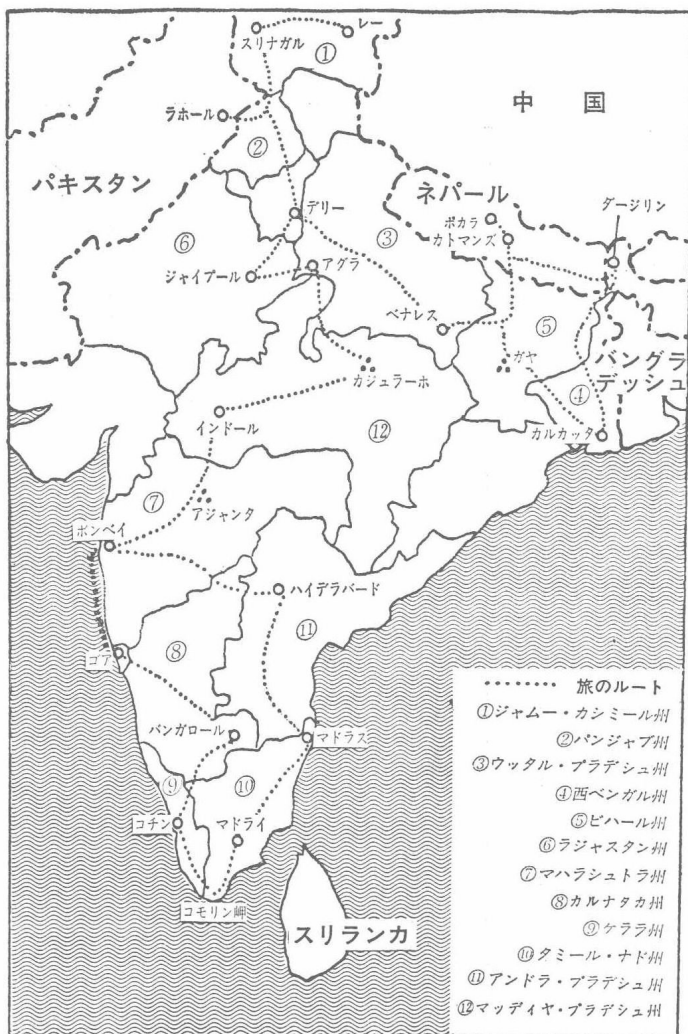
アクエリアンエイジの黙示録.....207

「アクエリアンエイジの黙示録」によせて（オノ・ヨーコ）.....211

エピソード.....212

改訂版によせて——インド以後の私.....215

インド・ネパール全図



1 国境を越えて

ラホール YWCA

ラホールの YWCA には、パキスタンからインドへ入ろうとする、あるいは逆にインドからやってきてイランに抜けようとする、いろんな国籍の旅人たちが旅の羽を休めていた。七月下旬、猛烈に熱い。私もとうとう、スカンジナビアの北の果てから陸路ここまでやってきたのだ。インドはすぐそこだ。熱い空気をただひっかき回すだけの大きな扇風機が、天井でグルングルンと音をたてながら回っている。

YWCA の用務係のシスターは、他のパキスタン人のように国民服ともいうべきシャルワール・カミーズを着ずに、インドのサリーを着ている。それが、彼女がクリスチャンであるためなのかどうかはたずねなかったけれど、このキリスト教の宗教施設でサリー姿が他のどこよりも目についたことは、やはり宗教的な意味もあるのだろう。

このシスター、私は日本人であるのに、気をきかしたつもりか、香港から来た英国籍中国人女性のプリシラを、わざわざ私のルームメイトにあてがった。同じ顔つきをしているからうまいくだろう、との親切心からだったのだろう。でも彼女は日本語を知らないし、私とて中国語はしゃべれないから、二人のコミュニケーションはもっぱら英語でということになった。

プリシラは私と同年代の快活な女性で、スペインでアメリカ人と恋におちて八カ月過ごしたあと彼とも別れて、やはり中東を抜けて陸路ここまでやってきたのだった。人恋しくなる夜ふけに、私はよくジェフ（会ったこともない彼女のボーイフレンド）の話を聞かされたものだ。いったんしゃべり始めると、彼女はもう私を眠らせてくれないのだ。

プリシラもインドに行くというので、どうせならいっしょに行こうということになった。彼女のお金がアメリカン・エクスプレスに届くのを待つ間、私たちは連日ラホール市街を歩き回った。私たちのような、寝袋かついでというタイプの旅人は、市街を回るのにも文字通り「歩き回る」のだった。お決まりの観光コースをツアーバスで走ることも、タクシーに乗ることもすくなくもなかった。

食堂で仲良くなったオーストラリア人のカップルは、もう世界を三年も旅して歩いているという。

「三カ月？」

「ノウ、三年よ」

「そうなる旅というよりは、むしろ人生そのものね」と私が言うと、「その通りだわ」という答えが返ってきた。

食堂のあちこちで旅人がテーブルを囲み、旅の情報交換に話が尽きない。「イランではブラックマーケット（闇市）がスゴくてね……」「〇〇の税関では……」

七月三十一日。ラマダン（断食月）は明けたばかりだ。とにかくじっとしているだけで、汗がしたたり落ちる。こんな時期にはこの美しいパキスタンの古都を訪れる観光客も少ないらしく、ごくまれに、ラホール・フォートとかバッドシャリ・モスクなどの、いわゆる観光名所で出会う「外人」といえば、私たちのようなタイプの旅行者たちばかりだ。

友愛の『K2』

ブリシラとオーストラリア人のカップルと四人で街に出た。通りは雨期のために泥だらけだ。牛やろばのお腹とすれちがいながら、泥と牛糞だらけの道を、慎重に足の踏み場を探しながら、二時間近くも歩いてフォートに向かう。土地の人々はそんな汚水をいっこうに気にかけるふうもなく、素足でパシャ、パシャと音をたてて歩いていく。「外人のくせに」リクシャーすら使わない私たちは、パキスタンの人々の盛んな好奇の目を浴びた。

もぎたてのマンゴーやパイナップルがワゴンに山積みされている。これが安くて舌がとろけるほど美味しいのだ。道すがら、のどが乾いてさとうきびジュースを飲む。さとうきびを押しつぶして甘い汁を絞り出し、かき割った氷といっしょにシェイクしてくれるのだが、コップにも絞り器にもびっしりとハエがたかっている。いかにも、「さあ、下痢をおこさせてやろう」と言わんばかりだ。

やっとのことでフォートにたどり着くと、疲れてしまった私たち四人は、まず当然のことにように木陰の、青々とした芝生の上に座りこんだ。

しばらくすると、一人、二人……と私たちの回りに人が集まりはじめた。最初はこちらも余裕をもって三人、四人……と数えていたが、そうしているうちに見物人は三十人ほどにふくれ上がり、無言のままつぶさに私たちを観察し始めた。私たちはまるで、動物園のゴリラにでもなったような気分だ。すると見物人の男の一人が、私たちに友愛のしるしとして(?) エサならぬ、パキスタンの名峰『K2』の名をもつ煙草をさし出した。私が「シュークリア」(ウルドゥ語のありがとう)と言って一本受け取ると、見物人のあいだにどよめきがおこり、いっぺんにせきを切ったようにいろいろな話を話しかけてくる。

彼らの好奇心を満たすことはとうていできないという結論に達した私たちは、腰をあげてフォートに入ってしまった。そして長いこと、荘大な闘いのモニュメントを歩き回った。陽も傾き

かけた頃、私たちはワゴン（小型の乗合いバス）で帰途についた。私が空いていた席に座ったら、車掌に「ナヒン」（ダメだ）とにらまれてしまった。この国では男と女が席を隣り合わせるなんてとんでもないことなのだ。あらためてよく見てみると、男性と女性には別々に分けられている。もっとも二の腕を出してただけで怒られたり、歌を口ずさんだだけで「女は人前で歌うものじゃない」とたしなめられたりしたイランに比べれば少しましかもしれないと、言われた通りに従った。バス停の待合所でも、男女は別々、切符を買うのも別々だ。「郷に入りては郷に従」わなくてはならないのだ。

とんだ、いいバイト。

パキスタン料理の夕食を終えたあと、一人先に部屋に戻ってベッドにうつ伏せになって手紙など書いていると、しばらくしてプリシラが憤まんやる方ないといった表情で帰ってきた。

「どうしたのよ」

「まったく頭にくるったらないわよ、スージー——私は旅を始めた頃からいつの間にか、名字のせいかスージーと呼ばれるようになっていた——と息も荒々しく怒っている。話を聞くと、プリシラが国からの送金待ちであることに目をつけた宿舎のパキスタン人のおばさんが、彼女に「いいバイト」があると言い寄ったらしい。それがどうやらそのお婆さんの秘密の副業